

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

1月 1日 今日の通読箇所 イザヤ書 51章9～20

「信仰の勝利」

「わたしこそあなたを慰めるものだ。あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、草のようになるべき人の子を恐れるのか」[12節]人間の慰めば気持ちと言葉ばかりで実力はない。しかし神はかつて「海をかわかし、また海の深き所を、あがなわれた者の過ぎる道とされた」[10節]のである。我々も神を深く信じ、人間や人間のなすわざを恐れないようにしよう。「人を恐れればわなに落ち入る」というみことばもある。反対に「わたしたちの信仰こそ世に勝たしめた勝利の力である」とも言われる。信仰の勝利を勝ち得よう。

1月 2日 今日の通読箇所 イザヤ書 52章3～12

「早足自慢」

「あなたがたは急いで出るに及ばない。また、とんで行くにも及ばない。主はあなたがたの前に行き、あなたがたのしんがり 最後部 となられるからだ」[12節]。我々はもともとせっかちでことを急ぎ、すぐ結果を見ないと承知できない。しかし神様には神様のテンポがあり、神様の時もある。決して神様の先に出たり、またうっかり遅れたりしないように、主に歩調を合わせて、忠実に歩まなければならない。早足自慢が泥棒を追いかけ「泥棒はどこだ」と聞かれると「ずっと後だ」などというのは、古い昔の笑い話のネタですよ。

1月 3日 今日の通読箇所 イザヤ書 53章1～12

「悲しみの人」

聖画の中にはイエスの肖像も多い。そしてその顔は例外なく「憂い顔」に描いてある。別に世界中の絵書きが相談したわけではないが、キリストの笑い顔はあまり見ない。ここに「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人だった」とある。人の罪を悲しみ、その許しと救いのために十字架にかかれた主は確かに悲しみの人であったのだ。しかも「彼はわれわれの悲しみをになった」ともある。ここに記された救い主キリストの預言は、涙無しには読めない。

1月 4日 今日の通読箇所 イザヤ書 54章1～10

「主の契約」

神様とイスラエルの民が、夫と妻の關係に喩えられている。神様はイスラエルの罪故に、ほんの暫く彼等を見捨てられる。しかし、イスラエルに対する神様

の愛は永遠に変わらない。[9 節]にはノアの洪水で与えられた約束が引用されている。これは全人類に対する神様の恩寵の約束であった。イスラエルに対する神様の永遠の愛は、平和の契約でもあって、彼等の功績や状況の変化によって変わることはない。ウィリアム・ケアリは[2,3 節]を引用し「神から大いなることを期待せよ。神のために大いなることを試みよ」と語り、自らインド宣教にその生涯をささげた。

1月 5日 今日の通読箇所 イザヤ書 54章11～17

「主の賜物と嗣業」

「これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼等がわたしから受ける義である」[17 節]我々は時に苦しみを受け嵐にもてあそばれることがある。あるいは攻撃を受けて恐れ、非難を浴びて困ることもある。しかし神の約束はこうだ。あなたとあなたの子供たちが神に守られるのは、美しく堅固な宝石の城の中にいるようだ。あなたの子供たちは、主の教えの中に育ち、大いに繁栄する。敵の武器の攻撃、言葉の訴訟、どれもあなたには歯が立たない。これがあなたが神に「義とされ救われた」という意味であり、これこそあなたが「神から受けた賜物、嗣業」なのだ。

1月 6日 今日の通読箇所 ヨハネの第二の手紙 1～6

「愛の基盤」

「選ばれた」(1 節)とは、導かれて、イエス・キリストを信じた人々に使われます。そのお互いは「真実に愛す」べきであることが、今までも教えられてきました。この愛について、大切なことは「真理を知っている」(1 節)ということで、著者や手紙の受取人や、また他の人々の共通点でした。愛は麗しく、尊いものですが、脱線の危険性も常にあります。主にある者たちの互いの愛の関係は「永遠に共にあるべき真理による」(2 節)のです。真理によって愛が築かれなければなりません。真理は互いの愛の基盤なのです。「永遠にあるべき真理」とはイエス・キリストをさしているように思われます。イエスさまご自身、かつて、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書 14 章 6 節)と言われました。イエスさまこそ、真理であり、愛であられました。

1月 7日 今日の通読箇所 ヨハネの第二の手紙 6～13

「強い警告」

父の戒めどおりに歩くこと、すなわち真理の道を歩くことが愛であり、愛の道を歩くことが父の戒めを守ることです。主を信じる者たちは、旅人をもて

なすようにと教えられ、これが信仰者の特徴のひとつでした。しかし偽りの教理を伝え巡回してくるにせ教師については拒否するよう強く警告されています。彼らはキリストが肉体をとってこられたことを否定し人々を惑わしました。福音書に記されたキリストのご生涯と十字架の贖いの死を否定するものでしたからよくよく警戒しなければなりません。ピリピ2章6~8節に「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」と、人となってくださった神なるキリストの恵みが記されています。

1月 8日 今日に通読箇所 ヨハネの第三の手紙 1~8

「真理のための同労者」

この手紙はヨハネからガイオへ書き送った個人的手紙です。一節に「真実に愛している」と書かれてあるように、ヨハネとガイオは福音に生きる者としての親しい信頼関係にあったようです。ヨハネの祈りによって、ガイオは神様から霊的状态が祝福を受けていたばかりか、肉体、その他万事において神様の祝福を受けていたようです。このガイオが「旅先にある者」に尽くした様子がよい証となっているとヨハネは書きました。5節の「旅先にある者」とは、ヨハネが牧会するエペソ教会から遣わされ、諸教会を巡回し旅行していた伝道者のことをさしています。「送り出した」とは、ただお祈りして見送ったのではなく、物質的な援助もしたということです。ですから彼らを助けるとは「真理のための同労者となる」ことだと書いたのです。

1月 9日 今日に通読箇所 ヨハネの第三の手紙 9~14

「二人の人」

ここには二人の人、デオテレペスとデメテリオについて書いてあります。デオテレペスは「みんなのかしらになりたがっている人」(9節)でした。教会内で勢力を張ろうという欲望を持っていたのです。またその勢力をもって、ある一部の兄弟たちを教会から追放しようとしていたのです。そこでヨハネは、使徒の権威を持ってしても彼に忠告を与える必要があったようです。もう一人はデメテリオで、彼はこの手紙をガイオのもとに届けた人だと思えます。このデメテリオは「あらゆる人も、また真理そのものも、証明している。わたしたちも証明している」(12節)と書かれてあるように、そのよい働きが多くの人々に広く知られていた人です。つまり、デメテリオの人物と活動については、何の心配もないから十分な活動をさせてほしいという、ヨハネからの依頼の手紙な

のです。

1月10日 今日の通読箇所 ユダの手紙 1～7

「信仰の戦い」

この手紙の目的は3節、4節にあります。「不信仰な人々がしのび込んできて」「神の恵みを放縦な生活に変え」「唯一の君であり、わたしたちの主であるイエス・キリストを否定している」(4節)からでした。ですから、どうしても手紙を書き送る必要がありました。「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰のために戦うことを勧める」(3節)ために。そして「思い起してもらいたい」(5節)と、かつて主がイスラエルの歴史においてなされたお取り扱いに目を留めさせています。ヨハネ福音書14章26節に「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわれる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」と主の助けが記されています。さらに墮落した御使たちおよびソドム、ゴモラは永遠の火の刑罰についての警告のための見せしめであり、神の裁きが不義を愛するすべての人に及ぶことを明記しています。

1月11日 今日の通読箇所 ユダの手紙 7～16

「神に会う備え」

にせ兄弟たちは主を否定し、そしめるのですが、聖書は御使のかしらミカエルさえ論争をさけ主に裁きをゆだねたとあります。論争はしばしば悪魔に捕えられる危険があるのです。さらに彼らについて「カインの道」「バラムの惑わし」「コラのような反逆」という旧約聖書の出来事を引用しています。「カインの道」とは弟アベルを殺したカインの利己心と神様への不正な態度を、「バラムの惑わし」とはバラムが偶像礼拝をし民に罪を犯させたこと、「コラのような反逆」とは指導者モーセに反逆したコラを指しています。「水なき雲」とは砂漠地帯では雨を待ち焦がれます。雲が出て雨を期待しても風に吹き流されて一滴も降らない、当てにならないことを、「さまよう星」とは真理から迷い出た無軌道な生き方を表します。主の再臨は裁きの日です。主を恐れずに犯した行いと、荒野の民のように主に逆らった言葉についても裁きが行われると記されています。今は恵みと猶予の時です。謙遜に罪をお詫びし主の十字架の尊い血によって清めただき「あなたの神に会う備えをせよ」(アモス書4:12)というお言葉を心に明記して歩まなければなりません。

1月12日 今日の通読箇所 ユダの手紙 17～25

「神聖な信仰」

ユダは愛するこの手紙の受取人に対して、5節から16節で旧約聖書を引用して裁きと信仰について語りました。今度17節では、わざわざ主イエスキリストと付け加え、使徒たちが神から任ぜられた権威ある使徒であることを明記し、彼らの教えに従うように勧めています。使徒たちが教えたことばの中に、「終わりの時」を予告するしるしとして、分派や御霊をもたない偽キリスト者が出るのが告げられています。しかし、真のキリスト者は「神聖な信仰」(20節)を土台として、自分の信仰生活を築き上げるように命じられているのです。この信仰は、イエス様から使徒たちへ、使徒たちから教会へ、教会から私たちへと伝えられてきたものです。だから私たちは「聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち、永遠のいのちを目あてとして、」(20～21節)信仰によって歩むように勧められているのです。

1月13日 今日の通読箇所 詩篇 第53篇1～6

「真の愚者」

ここに「愚かな者は心の内に『神はない』という」とあり、また箴言には「愚か者は戯れごとのように罪を犯す」とある。ルカ伝にも「愚かな者よ。あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるだろう」とあるが、「神はない」とむりに自分を説得しつつ良心をごまかし、必ずやってくる死をも、強いて思わないようにして罪を犯しつつける。その不自然な虚勢の姿こそ真の愚か者なのに、かえって彼らは教会を指して「愚者の楽園」などと言っている。本当に馬鹿につける薬はない。

1月14日 今日の通読箇所 詩篇 第54篇1～7

「密告者」

ダビデは亡命時代、手兵をもって国境をパトロールし、無冠無報酬で町や村を保護した。多くの町村はこれに感謝し、喜んでダビデとその一党のために生活必需品を提供した。しかし中には知らんぷりをする者もあり、反対にダビデがいることを密告して、サウルから恩賞を得ようとする憎むべき者もいたのだ。ダビデはここでもまた、その忘恩、裏切りを憎んで神の裁きを期待する。これもまた止むを得ないことと言わねばならないだろう。

1月15日 今日の通読箇所 詩篇 第55篇1～23

「祈りの詩」

ここのところマスキールで歌われた、ダビデの放浪時代、苦難の時代の詩が多

い。詩篇は全編、美しい「賛美歌集」で、また「祈りのお手本集」でもある。喜びと、感謝の溢れるとき、詩篇は本人自身よりも、もっと強く深く、感謝と祈りの言葉を教えてくれる。しかし実は詩篇には苦しく悲しい時の、うめくような祈りのお手本が多いのだ。人間の厚誼よりも裏切り、愛よりも迫害。そういうテーマが多い。詩篇は、歯の浮くようなロマンチズムでなく、人生の現実に対してリアルだ。

1月16日 今日に通読箇所 詩篇 第56篇1～13

「知りたもう神」

人間がどんなに苦しんでいても、困っていても、「神は沈黙していたもう。あのヨブの時のように」という人があり、神を信じ期待することは、現在の社会と人心の実状に合わない。つまり「神は死んだ」と極言する神学者さえいる。しかしここには、「神はダビデの放浪の日数を数え、その流した涙を皮袋にたくわえ、その祈りをすべてノートに記していただきさる」と神さまについて書いてある。実にこれこそ、ダビデとともに今も、全部のクリスチャンの人心に合う真理の教えなのだ。

1月17日 今日に通読箇所 詩篇 第57篇1～11

「祈りの勝利感」

信仰に入って間もない少年のころ弟が重い病気になり夢中で祈っていた。ところがある日突然、重苦しい祈りから急に解放されて心が非常に軽く明るくなった。「きっと祈りが答えられたのだ」と思ったわたしは喜びのあまり、病気はもっとも困難な状態なのに「病気は今日が峠でこれから良くなるよ」と断言したが、不思議にその通りになった。こういう経験はその後もくりかえされてきた。「わたしの心は定まりました。わたしは歌いかつほめたたえます」とは、きっとそんな体験だ。

1月18日 今日に通読箇所 詩篇 第58篇1～11

「悪魔らの勝利」

悪魔は人を誘惑しまた迫害する。まるで噛みつく蛇のようであり、また狼のようだ。時には洪水のように激しく、時には生えはびこる雑草のように始末が悪い。ここに詩人が「彼らの歯やきばを折ってください。その洪水を消滅させ、神の力で肉欲の雑草を踏みつけ、枯れさせてください。不潔で気味悪く粘りつく、蛭やかたつむりのような悪魔の業を、どろどろに溶かしてわたしを自由にしてください[6～9節]」と祈っている気持ちも分る。

1月19日 今日の通読箇所 詩篇 第59篇1~17

「高きやぐら」

この詩篇には「夕べごとに帰ってきて、えさを求めてうろつきまわる野良犬」のことが二度繰り返してでくる。また「神は高きやぐら」とも書いてある。鶏が犬に追われたとき地面を逃げ回っている間は危険だが、高い場所に飛び上がってしまえばもう安心だ。クリスチャンが悪魔に狙われたときも同じだ。靈的に高いところ、そこそが安全地帯なのだ。

1月20日 今日の通読箇所 詩篇 第60篇1~12

「最後の勝利」

イギリス人は「戦争は最後に勝てばいい」というそうだ。どんな戦争だって、途中では負けそうになることがある。そのとき「あなたは弓の前から逃れたものを再び集めようと、一つの旗を立てられました(4節)」そこで皆がもう一度勇気を奮い起こしたので、聖書史上有名なエドムの勝利となったのだ。伝遺の戦いにも、教会の働きにも、同じような事は多い。そういう時にこそ旗を立てて、戦いを勝利に導く人物こそ貴重だ。

1月21日 今日の通読箇所 詩篇 第61篇1~8

「英国の国歌」

6.7節は「God save the King」という英国国歌の出典のような気がする。このように国民は王や政府に対して、文句をいうだけでなく、また祈らなければならないのだ。同じく教会は牧師のため、家族は父親のために祈ることが大切だ。「理想的なお父さんでない」と、注文や文句ばかり言わないで、彼の困難な重い責任のために祈ろう。これは家族の幸福の秘訣の一つです。なにしろ今日は「父の日」ですからね。

1月22日 今日の通読箇所 詩篇 第62篇1~12

「注ぎ出す祈り」

[7節]に「民よみ前にその心をそそぎいだせ」とあるが、水の少ないこの地方では、動物の革袋に水をいれた水売りが毎日やって来る。奮発して水を全部買おうということになると、水売りが、その革袋の後足を持って逆さに引立てる。その時の水の出方を「注ぎだす」というのだ。われわれが祈るときもそのように、謙遜、正直に、また信仰をもって、心の全部を注ぎだして祈ることを、主は求めていたもうのである。

1月23日 今日の通読箇所 詩篇 第64篇1~11

「闇討ち」

先週「職業」のお話をしたが、社会や職場の人間関係は難しい。陰口や中傷の

「闇討ち」「だましうち」も時々はあるようだ。ここにも「剣のように研ぎ澄まされた舌」の闇討ちや、言葉の「わな」がでてくる。あまりえげつないことのできないクリスチャンは、まるで無防備のような感じがするが、しかし経験者ダビデの詩篇の言葉は、私達を慰め励ます。主はそういう場面でも一切を知り、われわれを守りたもうのだ。

1月24日 今日に通読箇所 詩篇 第65篇1～13

「自然界の奇跡」

[8節]「人々も、あなたのもろもろのしるしを見て恐れる」しるしとは「奇跡」の意味で使われる言葉だが、ここでいうのは自然界の、日々の、雄大な奇跡だ。これこそ、時々、いわゆる「奇跡」以上のしるしなのだ。もともと詩篇は全巻、美しい詩だが、太陽、慈雨、田園、牧場などを歌った6節以下の自然描写は、特別素晴らしいと思う。

1月25日 今日に通読箇所 詩篇 第66篇1～20

「エジプトからの開放」

[10,12節]には先祖のエジプトでの苦難。[5,6節]にはその解放と、紅海の奇跡が歌われている。この解放は、イスラエルの建国に繋がり、彼らの末代まで忘れえぬ記念であった。彼らはどんな苦難の時にも、この記念を語り合い、神の救いを信じて励ましあった。長い苛酷な運命にもかかわらず、イスラエル民族が滅亡しなかったのは世界史の奇跡だ。われわれも、いつも神の恵みを繰返し思い、また語り合うことが大切だ。

1月26日 今日に通読箇所 詩篇 第67篇1～7

「祝福の光」

あのエリヤの時のカルメル山のように今も教会に神の火と雨が注がれ、これを見て、まだ神を知らない人々が神を信じ神を崇めるにいたるように、われわれは先週の礼拝でお祈りした。今朝のこの詩篇の1～4節に歌われているのも同じ祈りである。かくて神を知らなかった人が救われて別人のようになり、神を崇め、賛美するのを見るほどの喜びはない。今朝もその一人の証を聞くことができるのは感謝だ。

1月27日 今日に通読箇所 詩篇 第68篇1～10

「嗣業の回復」

ここにもイスラエルのエジプトからの解放と、彼らがカナンの地に領土、すなわち嗣業を得たことが歌われている。絶滅に瀕したエジプトの奴隷たちが解放されただけでなく、その子孫までの生活のために「乳と蜜の流れるカナン」を与えられたとは、何たる感謝だったろう。今も神は霊の恵みとともに、生活の



恵みでもわれらを祝福したもうのだ。

1月28日 今日に通読箇所 詩篇 第69篇1～10

「百合の花の曲」

詩篇も賛美歌として、いつも歌われていたので、タイトルには音楽用語がよくでてくる。この詩篇の「百合の花のしらべ」や、別の詩篇の「あけぼのの鹿のしらべ」などもそれで、当時一般に歌われていた曲を使ったのだろう。ちょうど今集会で聖歌を歌うとき、司会者が「これは『オールド・ブラック・ジョー』の曲です」また「これは『ましろき富士の嶺』の節で歌います」などというのと同じだと思う。

1月29日 今日に通読箇所 詩篇 第71篇1～9

「老年者の保護」

老年に及べば誰しも、淋しい病気、孤独などを覚悟しなければならない。今日日本で多くの人の関心のテーマだ。個人も国も老後の備えは大切だ。しかしダビデがここに祈っているように「幼い日から神に従い、老年のために主の保護を祈る」信仰の生涯はもっと大切だ。人それぞれ、その時その時の必要に応じて、神はいつも行き届いた助けを与えて下さることは確実だからだ。

1月30日 今日に通読箇所 詩篇 第73篇1～13

「悪しき者の繁栄」

「悪い者ほど良く眠る」「善人は若死にする」などと皮肉な言葉がはやるくらい、世の中には矛盾が多い。クリスチャンでもそれが気になることがある。その結果、急に自分のまじめな信仰生活を空しく淋しく感ずるが、これは一つの試みだ。この詩篇は、アサフがどうしてこの試みから立ち上がり、淋しい心境から回復したか、その貴重な体験が記してある。なんだか人聞味があって、わたしは大好きな詩篇です。

1月31日 今日に通読箇所 詩篇 第73篇13～28

「最後を悟る」

悪者の栄えるのを見て、まじめな信仰生活が淋しくなった。そのときそれを人に話すこと、自分で考えることなどで結論は出ない。それはただ人をつまずかせ、ただ自分を疲れさせるだけに終わる。ここに詩人はいう。「神の聖所にいってその最後を見た」と。そのとき彼の心はこの矛盾の悩みから解放され、再び信仰の勝利を得たのだった。